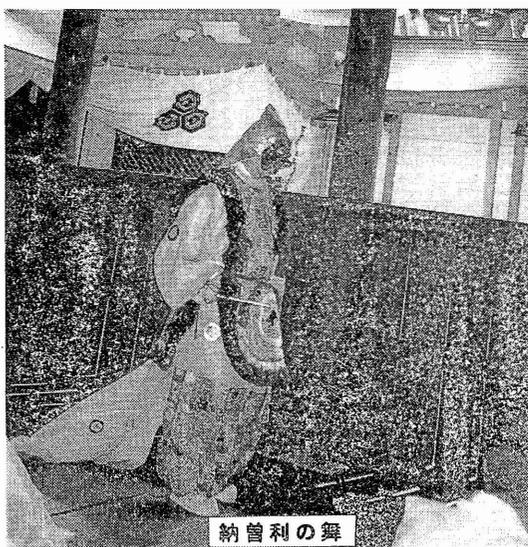


間もなく、雅楽が奏でられ、緋色の衣を着け、柄のある袴に、金色の縫い取りのあるきらびやかな前飾りを身に纏い、仮面をつけた「陵王」の舞手が姿を現しますと、これまで静かだった参拝者の中から、待ち構えていたカメラマンたちが、一斉に立ち上がりました。

「陵王」は、唐楽で別名「蘭陵王」と云い、昔、中国の王が戦場で軍の士気をあげるために、仮面をつけていたが、大勝利をおさめ、その時、喜んだ兵士が、この曲を作ったという。また一説には「没日還午楽」ともいわれ、王子が父王の陵前で苦戦を喫いたところ、沈みかていた日が再び昇り、勝利を得て、この曲を作ったという故事による。（邦楽百貨辞典・雅楽より）

【「納曾利」（ナソリ）】



納曾利の舞

「陵王」の舞に引き続き舞った「納曾利」は、「陵王」衣が緋色であったのに対して、

すべてが地味に装い、竜唐織紋のある毛縁の装束で首を横したお面をつけ、後頭部は緑色の地に金糸で縫いとりのある布で覆われ、上着は、橙色の衣を着けています。

「納曾利」の舞は、童が楽しそうに遊ぶ姿を舞にしたものと云われ、古えには、競馬や相撲の勝者を祝って奏でた曲ということですが、動きがとても軽やかでしたが、曲の一部は何となく、もの悲しい旋律を奏する部分があり、概して厳かな雰囲気か漂っていました。

辞典によると「陵王」が唐楽であるのに対して、「納曾利」は高麗楽であり、「納曾利」は、最高傑作であると記されています。

「納曾利」の舞手が上手の幕に消えて行って、大きな拍手が起り、暫し鳴り止みません。参拝者は、これら二曲の舞樂に酔いしれて、身も心もひきつけられた風情で、それはまたそれで印象深い光景でした。

舞樂が終わった後で、地元の代表の方が大宮本殿の前で玉串奉奠をされた後に、拝殿にいる参詣者が御幣拝戴（お祓い）を受けまし

た。その御幣拝戴とは、長さ一丈を越す大きな御幣を持たれた「厳島神社の野坂元良宮司」さんのみまえて一同は、頭（マ）を垂れて順を待ち、前列から席を入れ替わって、拜戴を受けました。

引き続き、流鏝馬の神事を拝見。狩衣を纏った騎手が馬に乗り、社殿の前で天地の四方、六方に矢を放ち、厄除けをする神事で、地御前神社では江戸初期の頃から、他の神事と共に行われてきた行事と云われる。それから社殿の前で三回ほど馬で廻って、社殿入口の鳥居の地点の的に向かって矢を放つ。うまく的的中すると威勢のよい歓声があがります。しかも一騾程の距離を三度も往復するというので、馬も騎手の方々も大変ご苦勞なことであろうと思いましたが、中には、馬と共に旧道を歩く人もいますが、大体の人は神社の前で馬が戻ってくるのを、辛抱強く待っていました。

流鏝馬は、平安時代に宮中で行われていた端午の節句の行事で、ここでも馬を走らせ、



御幣奉戴（御祓い）  
（野坂厳島神社宮司）